

エッセー

一口にエッセーというものの、イギリスのエッセーの取材は実に広い範囲にわたっており、内容が千変万化で、この内容で、やはりエッセーという一つ名称に含めていゝのか知らと思えるのであります。余り長くなく、一つの事柄を書き記した作品とか、切れぎれの事柄をとりとめなく書き留めたもの位では済みそうにありません。エッセーは邦語で何と訳しましょうと当のエッセーの内容までその一つの訳語では示し得ないでしょう。イギリスのエッセーはその内容の相違から、名称は同じでも意義が變つて来ているのであります。今では、あらゆる事柄について書いた長くない散文作品ということになつていようで、バークンヘッド伯はその編するところのイギリス・エッセー百粹の序で、このことに触れ手厳しいことをいっています。誌上エッセーを書く手合で、スチール、ジョンソン博士の陰にかくれるものがあるといつてこれを叩いているのであります。では、エッセーとは。

いつも引合に出るのは金科玉条のオー・ジイでありまして、これはジューと割注してありますように、明らかにジョンソン博士の定義と、それからフランスのモンテーニュのエッセーに基く見

河瀬嘉一

解とが合したものとあります。長くない作品であること、規則正しくも秩序正しくもないということと、この二つの考方が含まれているのであります。オー・ジイ、イー・ビーの与えています語源からいつて、エッセーは完全でなく、組織が立つていないということになります。エッセーは散漫のように見えて——この散漫ということをやウイリアムズはその「エッセー」の中でしきりに述べています——なかなか筋道が通つており、その上に洗練までされているのであります。エッセーは説教、報告、批評、政治、歴史、科学といったように、自然、人事の万般に及ぶのでありますので、又してもエッセーと呼ばれるのは内容によるのではなく、技巧か何かによつてのことではなからうかという疑念が起るのであります。「エッセー論」でスクアアのいうように、エッセー家となりますとその扱う事柄が割合に限定されますので、その書くところのエッセーも同じく限定されるのであります。ペンソンがその「エッセー家論」でいうように、文学上の名称、つまり文学表現の形式を分類しようとしますと、はたと当惑するのであります。ただ便宜上、そういう名称を使うに過ぎない

とあれば、もたがった疑念の首も自ずと下がるといったもので
す。

エッセーはイギリス文学で見逃してならないものとなつていま
して、お国柄のいい分で、イギリスのものといはれます。イー・
ビーではフランスのモンテーニュからこれが初まつてるとして
います。そのモンテーニュのエッセーは自己表現でありまして、
「自身がその著書の土台であるから、読者はこのとるに足りない
事柄に暇をかけないように」と卑下してことが、フロリーオ訳で
見られます。まつたくの主観の立場からの文学であります。モン
テーニュがその九年がかりの作品にエッセーという名称を付け
たのは、散文の試作作品であり、実験に過ぎず、折にふれて自己
描写をしたので、これを論文、説教と間違はれたくないとの心遣
いでもあります。実験でも、自己の分析実験だったのであります。

イギリスでベーコンがエッセーを出したのはもとよりモンテー
ニュより後れ、これは客観のエッセーであつて、モンテーニュの
ものとは異り、ベーコンの博識と経験とで万事に分析実験を加え
た結果なのであります。ベーコンのエッセーが簡潔で含蓄がある
とされるのは、冗長に流れないよう、わざと圧縮の形式をとつた
からであります。エッセーが形式上の一特色として余り長くない
というのは、このところを指すものでしょう。これはよく引合に
出されますが、同じエッセーでも、ベーコンのエッセーはロック
の人間性論のエッセーとも違えば、ポーブの批評論、人間論の
エッセーとも違うことは、イー・ビーに指摘されています。

ベーコンに次ぐカウリーのエッセーは已を語るもので、新しい

文学形式として迎えられました。ベーコンが失脚してそのエッセ
ーも亦顧みられなかつたからであります。「已を語る」によりま
すと、カウリーは十三の時既に賦を作つたといつた人物でありま
した。イギリスのエッセーはカウリーに初まるとさえイー・ビー
ではいれるのであります。自己の分析実験がここに見られたから
でありましょう。ラムはカウリーと同じ行方なのであります。こ
のラムに行着くまでにスチール、アジスンが出まして高く評価さ
れるのであります。しかしスチールのエッセーには初めから目的
があつて、社会生活の虚偽をさらけ出し仮面をはぎ取つて良習を
致そうとしたのでした。社会批判なのであります。エッセーは
「タットラー紙」に載つたので日常生活に入りこみ、大衆に親し
み易くなつたのでありますが、もうこうなれば気散じにエッセー
は書けなくなり、発行部数が気懸りになるわけです。スチールは
余業としてタットラー紙を発刊しましたので、失職と共にそれは廃
刊になつたのであります。

アジスンはスチールを援け、またその独創の才に励まされてク
ラブという社交様式をとらえ、風格のあるエッセーを書き、新し
い社会生活を写し、文芸批評の標準を高め、さらにサ・ロジャ
ズという性格を上げたのであります。氣質描写がこゝに初まつ
たのであります。知性と良識とでもいうもののエッセーでありま
す。ジョンソン博士のエッセーは別の動機から書かれたのであり
ました。とにかく、ジャーナリズムとは切離されないエッセーが
生れたのであります。

浪漫情調のみなきつた頃のエッセーは、コールリッジ、ラム、

ハズリット、デ・クインシーの手により、文芸批評、市井、身辺、自然などの描写が際立つて来たのであります。

書物を貸すならこの人と、ラムから目差されたコールリッジは論理家、形而上学者で詩人でありました。

ハズリットのエッセーの最高水準は「旅に出ること」となっています。コールリッジと共にイギリス・ルネーサンスの文学に新たに興味を起させたのであります。ウイリアムズはその「エッセー」の中で激賞しています。行文流麗。

デ・クインシーは夢想の作家で、エッセーの材料は挙げて「告白」の中に投入したのであります。「イギリスの郵便馬車」では元氣一杯のところを見せて、示唆に富みます。

イギリスのエッセーと断然いはれるがエリアのエッセーであります。カウリーのエッセーがこゝに行着いたのであります。エリアはラムであります。ラムは「南海商社」の中で、もとの社員エリアの名前を戯れに名乗つたのが元で、エッセーではエリアで押通したのであります。ラムの一生は哀感と茶気との一生でありまして、それがその儘エッセーに現はれていますので、順序を整えればエッセーが伝記になります。ラムのエッセーを文学エッセー、本格エッセーと呼ぶべきであります。ラムはエリザ人でありますので、行文は古雅、それに引用を縦横に駆使するのであります。そのエッセーは描写、回顧、芸談、感懐、告白、夢幻に及んでいまして、そのうちで、例えば、自己を語つてもそれが万人に通じるのでありますから、ゆつくり味おうと、急いで読もうと興味津津たるものがあります。

ここまでエッセーを追つて来ますと、イギリスのエッセーはペーコン流とラム流になります。自家人間の直接の流露によるものであります。ペーコンのエッセーが今の形式をとつて出版されてラムのエッセーまでが二百年であり、ラムのエッセーがエッセー・プロバ、エッセー・パー・レクサランス、本格エッセーなのであります。こうなりますと、慣用からエッセーと称せられるものをその儘容入れ、名称にこだわらないで差支ないわけであります。ジャーナリズムと密接の関係があれば、新聞エッセー、ペリオジカル・エッセー・誌上エッセー、それに諷切物、連載物と別けても亦差支ないであります。目的があれば目的のエッセーといつたように、自伝的、瞑想的、倫理的、その他、と分類して見るもよいであります。

エッセイとは散文で、ある事柄について即興に任せて心のゆくまま漫然と書かれたような見えて筋道が通っており、余り長くないもの。多少洗練されてい、自家人間の流露してるのが上乘。といつた見方は成立たないものでしょうか。簡潔であること、圧縮してあること、漫然として即興に任せるようで、どこかに節度と眼目のあること、理路整然としていて理智に訴えるよりは、むしろ心情に訴えること、と、ここまで考えたくありません。が、慣用のエッセーを認めますとこれは余計なことでありませう。ラムの頃から今に一飛びしますが、むかしはむかし、今は今で、イギリスではエッセイの種類が變つているのであります。昔の哲人のように静かに塔に引きこもり、おもむろに落想の熟するを待つて、エッセイを草案し、入念にこれに手を入れ、釣人が寸に足りない

小魚を元の流れにもどすように引出しに返し、時々取出して、ここに一節を加え、かしこの一文を削り、さては、この使い古された一語を、長考の挙句、余人では思い浮べない他の一語で替え、絶えて久しい世間に作品の封切をするといった極端は考えられないのであります。それでも、エッセー家は人生の傍観者、漫歩家、分析家、批評家でありますので、見聞を観察、記録、解説して、その意義と美とに空想を働かせるのであります。「こんなことを考えたことにはあるにはあるが、どんな連がりがあるのか見たこともなければ、その事を言葉に表わそうとしたこともない。」と読者をしていわしめるのです。また、エッセー家はその題材を教授が扱うようにはしないで、美術家のように思想の可愛い結晶を化学者が取上げて、成分を論じ他の化合物との関係を説くようなこととはしないで、玉作りの名人のように各面をいつくしんで磨き、陽が当ればきらりと光るようにし、変つた独自の意匠を加えて、美術愛好者をひきつけ、永くこれを愛蔵させるのです。とウイリアムズはその「エッセー」で申します。ベンスンの方でも、エッセー家は少くとも他人をしても少し人生を愛し、人生の無限の変化にも悲喜にも備えさせようと欲するのだ、といっています。

Edmund Gosse : Essay, Essayist. E. B. vol. 11.

Earl of Birkenhead : The Hundred Best English Essays

N. L. Hallward : Essays of Elia.

L. C. Squire : An Essay on Essays

A. C. Benson : The Art of The Essayist 等々。